CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kyoto University Research Information Repository
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository
KYOTO UNIVERSITY

Title	計画1-2 和歌山県、奈良県の野生ニホンザル地域個体群とそれをめぐる社会的要因(VI 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	五百部, 裕; 伊谷, 原一
Citation	霊長類研究所年報 (1996), 26: 71-71
Issue Date	1996-11-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/164847
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

2．研究成果

（1）計画研究

計画1-1

黒部川流域に生息するニホンンザル地域個体群の動態

赤座久明（国立立山少年自然の家）

昨年度に続いて，富山県下新川郡宇奈月町の黒部川流域に分布するニホンザル野生群を対象にして，生息調査を行った。

95年３月に，それまで発信器をつけていなかった群れ（ＭＴ群）のメスの成体を捕獲して発信器を装着し，すでに発信器が着いているＯＮ群，ＭＯ群と合わせて３群のテレメトリー調査を行った。

３群の遊動域の配置を比べると，下流側から上流側に向けて，ＯＮ群，ＭＯ群，ＭＴ群の順となるが，ＭＯ群とＭＴ群は遊動域の大部分が重複しており，同じ土地を利用していた。

ＭＯ群とＭＴ群の遊動域は一年を通して黒部川に沿って細長く広がっているが，ＯＮ群は夏季に黒部川の支流の尾沼谷に沿って標高1800m地点まで移動するため，他の２群とは違い，黒部川の本流から大きく離れた遊動域をもっている。観察する機会の多かったＯＮ群とＭＴ群の秋と冬の遊動域の長径を比べると９月～11月はＯＮ群が3650m，ＭＴ群が3930m，１２月～２月はＯＮ群2880m，ＭＴ群2980mとなり，秋に比べると冬の遊動域が小さくなる傾向が両群で観察された。これは，従来直接観察法で得られた遊動域の季節変動に関する知見と一致していた。

計画1-2

和歌山県、奈良県の野生ニホンザル地域個体群とそれをめぐる社会的要因

五百部裕（京都大・理・人類），伊谷原一（京都大・アフリカセンター）

本研究は、和歌山県中津村と奈良県大塔村において、生業や歴史的経緯に注目し、過疎化問題や兼業による働き手の変化など人間側の諸問題を考慮に入れた猿害発生メカニズムを考察することを目的とした。本年度は、平成５年度に実施したアンケート調査によって得られた結果を踏まえ、住民への聞き込み調査と野生ニホンザルの生息実態調査を平成７年５月と平成８年２月に行った。

中津村は林業主体の村で、人工林率が７割を越えている。ここでは、換金作物として栽培しているシイタケの被害が大きかった。サルは、北隣の金谷町、西隣の川辺町、および東隣の美山村とそれぞれ行き来する計３集団が最低でも生息していると推定された。

大塔村では、以前は換金作物としてシイタケを栽培していたが、サルによる被害が増大し、サルの被害にあいにくいという理由から薬草の栽培に切り替えた。しかし、最近では、薬草もサルの被害にあうようになってきた。サルは、西隣の野迫川村、および南隣の十津川村とそれぞれ行き来する集団と白六山を中心に遊動する集団の計３集団が生息していると推定された。

本年度は、サルの生息実態を明らかにすることを中心に資料の収集と分析を行ったが、来年度以降は、住民への聞き込み調査で得られた資料も分析し、当初の目的である人間の生産活動や生活用式の変化などの問題も考慮に入れた猿害発生のメカニズムを考察していきたいと考えている。